

私の半生

才能教育研究会会長

鈴木 裕子 ②

木曾福島へ

家には3人のお手伝いさんがいた。そして、後から聞いた話だが、赤ん坊だった私は体が弱かったために看護婦さんが住み込みで面倒を見てくれたという。

1943(昭和18)年、戦況も厳しくなり、父の会社とともに私たち一家は、3人のお手伝いさんと長野県木曾福島へ疎開することになった。

木曾福島には福島製糸工場や国用製糸工場があったが、昭和初期に起きた世界恐慌の影響を受け、製糸工場は休業状態だった。太平洋戦争が激しくなると、軍需産業が地方へ疎開することになり、遊休施設だった製糸工場を電線工場やグライター工場に利用することになった。グライター工場では、飛行機の爆音識別のための擬音をつくり出す楽器に使うというのでバイオリンの製作も行われたようである。

2歳のジュン



そのようなこともあってか、たまたま父の知り合いが木曾福島にいて、行くことになったらしい。最初、

木曾山林学校の木工室に疎開し、楽器製作の代わりにグライターの部品を作っていた。そして間もなく、伯父の鈴木鎮一も、戦争

3歳から毎日バイオリン

未亡人になつていた叔母のひな子と木曾福島へやってきたが、ワルトアウト夫人は単身、横浜の銀行に勤めていた。伯父たちは私たちの隣に住み、伯父は父の仕事を手伝っていた。3歳になった私は伯父にバイオリンを習い始めた。通常は週に1回のレッスンだが、隣同士といふことで毎日通った。伯父はとても優しく、レッス

中でも怒ったことがなかった。家での毎日のレッスンは父と母が見てくれていたが、伯父は、私が上手に弾けなくとも論すように教えてくれた。バイオリンの持ち方、指の使い方、立ち位置など、少しおかしなくても「駄目だね」とは言わなかった。怒ることもなかった。また、母の静子も「名は体を表す」通り静かな穏やかな人だった。私は幼いころ、ほとんどの時間をお手伝いさんたちと過ごした。3人のお手伝いさんは、20代のちいちゃん、おこつちゃん、そして「ばあちゃん」と呼んでいたふみさんだった。が、みんな私をとててもかわいがってくれた。2人の若いお手伝いさんたちは私の家から洋裁も習いに行き、ちいちゃんは木曾福島の人へお嫁にも行った。

(聞き書き・佐藤文字 井井人)

